

本部よりの紹介

井口大先輩からのお便り紹介

我が人生100年を振り返って

建築学科S7年卒業 元九州支部長

井口久義



長く人生を生きてくると、肉体的にも様々なトラブルが生じる。私は重度の加齢黄斑変性症を患い、周囲がわずかに見えるだけだが、関係者の強い勧めと支えにより何とかこの拙稿を書き上げることが出来たことを感謝する。

1) 小中学校の頃

私の育ったのは福岡県の筑後川河口付近の農村地帯である。毎日農作業で辛かったが、雨の日は農作業を免れた。こんな日は有明海の干潟でムツゴロウやカニの仲間のホンガネを捕まえた。これらは大切なおかずとなったので、母は大変喜んでくれた。

中学は柳川の傳習館に徒歩通学し、相変わらずの農作業は私の頑健な体を育ててくれたと思う。得意な弁論には熱中し、様々な弁論大会に度々参加させていただいた。高等学校進学に際しては、入試に物理・化学のない福井高工に向かった。

2) 福井高工の頃

当時の校長は特異の教育方針を貫く関盛治先生だ。授業に一定の出席数があれば落第はないが、足らな

ければ退学となった。

私の選んだ建築科は定員40人、全校3学年で120人だった。友人と共に運動場の草原に寝転んで白山を望みながら、青春の夢を語り合った。一方、スポーツでも籠球部のセンターとして全員で練習に励んだ。この熱心さのため学校はボール代を捻出してくれたので、一層士気が上がった。

昭和6年、高工3年での現場実習は東京築地の中央卸売市場で級友数名と一緒にだった。大冷蔵庫の土台のコンクリート打ち作業を経験した。銀座三越、服部時計店や国会議事堂は関東大震災後の大きな復興工事最中だった。

3) 卒業後の軍隊生活

昭和7年の卒業時、世の中は不況で民間にこれという就職口はなく、学校の推薦により軍隊の技術職を選んだ。雇員として採用された配属先は第11師団で、お遍路さんの行き交う徳島県善通寺だった。不安な時代で、26事件が起こる一方、双葉山の69連勝が達成された頃でもあった。昭和12年には技手になり、姫路の第10師団に転居した。

しかし間もなく支那事変のため支那に第2野戦建築部の技手として派遣された。昭和12年には太原で、13年には石家荘で砲台、倉庫や野戦病院の建設に従事した。移動のためにはトラックに乗り、ガタガタ道で猛烈な黄土の埃に悩まされた。その後北京に移り、永久建設設計に携わった。帰国は15年3月で原隊の姫路師団に戻った。翌年中部軍司令部に転属し、大阪を本部として防空作戦地下室等の建設に携わった。

太平洋戦争最中の昭和17年には陸軍技術将校大尉になり、19年にはフィリピンに配属され、生死を分ける体験を何度かした。

終戦間近、我が軍はミンダナオ島の中央部マライバライから東方約80kmに位置するワロエへ転進した。米軍の爆撃で武器弾薬・食料もない惨めな部隊だった。熱帯多雨地帯の密林でヒルや野生の小さな芋以外の食べられる物を探すのは極めて困難で、餓死・病死が続出した。私には幼少の頃からの農業体験が助けになり、食べられる草や小さな芋を探し出して餓死から何とか

免れた。

昭和 20 年 8 月末ワロエで終戦を知らされた。我が部隊は降伏後、レイテ島タクロパンの捕虜収容所に移された。収容所内では私も少佐として真つ当な待遇を受けた。しかしマラリアで 42 度の高熱が出た時は意識を失って暴れ、精神病院に移された。意識が戻った時、私は縄でベッドにくくり付けられていた。

昭和 21 年 3 月 10 日に日本に向けて船出ができ、3 月 20 日に浦賀に着いて復員し、500 円の手当てを手にして故郷に向かった。

4) 戦後建築業に従事して

軍隊での人間関係が縁で、戦後は中堅大手の建設会社である西田組で働くことになった。しかし、10 年を経過した頃、西田組は倒産の憂き目に会った。この時自分で会社を興す決心をし、1 級建築事務所として株式会社井口工務店を福岡市に設立した。

この頃或る商社から軽量鉄骨 LGS の研究を勧められ、実行に移していた。このため天神の電信電話局の移転工事に関連して新設される仮局舎の設計を井口工務店が請け負うことが出来た。この仕事が会社の基礎造りに大いに役立った。

会社の発展と共に社内での人間関係が複雑になり、数々の問題に直面して心の平安が乱れてきた。だが、化学者であり仏教の教えに詳しい先生との出会いもあり、65 歳から毎月仏教の勉強会に出席するようになった。特に親鸞の教えである教行信証を幾度も読み、南無阿弥陀仏の光と慈悲の意味が理解できるようになると、次第に心の安らぎを得られるようになってきた。これからも命ある限り、仏法の勉強を続けていきたい。

5) 福井大学同窓会九州支部会のこと

昭和 23 ~ 24 年頃、世の中も少し落ち着いて本校

1 期生の伊藤氏による九州市部会結成の働きかけによって天神の竹村会館で第 1 回の支部会が開かれた。その後毎年支部会の総会が定期的に行われ、常連が 15 名位である。しかし九州新幹線が博多まで開通した年は本部総会を兼ねる特別な会となった。

また、支部会総会を長崎、熊本、宮崎、沖縄と各地で開くことにより、会員の活発化に努力してきた。九州の支部長はその後井口、山崎、和田、畔柳、藤田氏と受け継がれた。

支部の役割として地方の同窓会員同士の絆を深めることは大切である。これは将来も積極的に引き継がれてほしい。また、九州支部の活躍は建築科が中心になってきたので、機械や電気科の卒業生の活躍が十分とは言えない。幅広い分野での更に活発な交流が望まれる。

私事ではあるが、私の 100 歳の誕生日を迎えた平成 22 年には、いつもの顔ぶれ以外に 30 名ほどの出席者から格別に祝っていただき感激した。

— 後書き — 工業会事務局

九州支部長の藤田さんから元九州支部長で元気に百歳を迎えられた井口先輩に寄稿していただくことを事務局に提案がありました。

事務局から早速依頼状を出しましたところ、快い返事が井口さんの娘さんからありました。井口さんは高齢のため、書けないので口伝えを娘さんが書き上げました。そして婿さんが、原稿に仕上げた連携プレーでの投稿でした。

原稿が届いた数日後に大先輩井口さん本人から、百歳とは思えないしっかりした確認の電話が事務局に入りました。

大先輩井口さんの百年のしっかりした歴史と温かい家族愛は工業会会員に元気を与えてくれるのではないのでしょうか。